

関節モビライゼーション臨床報告 4月度 (2018)

【手指関節】

患者氏名	日付	運動部位	効果	詳細
Y.Kさん 81歳 女性	4/4	肘 手指	手指の 伸展制限 ○	気温低下の冷えにより、手指の屈曲拘縮は増悪していました。肩、肘関節の可動はスムーズです。施術後は手指のこわばりがやや改善がみられ、本人実感でも伸展がしやすくなったそうです。
	4/11	肘 手指	手指の 伸展制限 △	手指に限らず全身のこわばりが増えています。施術時に左手小指付近に圧痛の訴えがあり、手指の可動も乏しい状態です。施術後の改善もみられません。
	4/20	肘 手指	手指の 伸展制限 △	前週よりややこわばりは少ない状態。施術時に手根部に圧痛があり。所見では手指の伸展動作がスムーズにみられましたが、本人実感は変わらず。
	4/25	肘 手指	手指の 伸展制限 ○	施術時の圧痛はなく、手指の可動性は前回より良好な状態です。施術後によりスムーズな伸展動作と可動域の改善がみられ、本人実感もありました。
T.Fさん 90歳 女性	4/6	手指	手指の 屈曲制限 ○	右手指の掌屈制限があり。手関節は動作特に問題ありませんが、指関節は屈曲が乏しい状態です。他動で屈曲を誘導するとやや痛みが出現しています。施術後は掌屈が容易になっていました。
	4/13	手指	手指の 屈曲制限 ○	引き続き、右手の可動性はやや良い状態を維持しています。指関節の可動は乏しいものの、全体としてはよく可動していて、痛みも出ていないそうです。
	4/20	手指	手指の 屈曲制限 △	手指の掌屈動作が再び制限が増えています。痛みは出現しておらず、施術後に改善の所見がみられるものの、本人実感はありません。
	4/27	手指	手指の 屈曲制限 △	右手指の屈曲範囲は前週同様で、やや動きが重い様子。先端の関節ほど屈曲制限が顕著です。施術後に若干の改善がみられ、スムーズに握り込みをしていましたが、本人の実感はないようです。
Y.Yさん 79歳 男性	4/5	肘 手指	上肢の 重だるさ ○	常時、両上肢に重だるさがつきまとい、臥床でより増悪します。手根骨の施術後に、右手と上肢全体の重だるさが軽減しましたが、左上肢については改善実感なし。
	4/12	肘 手指	上肢の 重だるさ ○	右上肢の筋緊張が顕著にみられ、重だるさも前週同様に強いようです。右肘関節にわずかに屈曲制限があり。施術中から重だるさの軽減があったようで、途中眠っていました。
	4/19	肘 手指	上肢の 重だるさ △	上肢の重だるさは引き続きあり。右肘関節の屈曲制限は解消されています。施術前後の所見に変化なく、本人の改善実感ありませんでした。

○：一定の効果、実感あり

2→1：施術前後の痛みの変化（本人にとっての最大痛値を5に設定）

△：効果の本人実感があまりない

その他 臨床報告

「効果がみられなかった症例」

ほとんど効果がみられなかった症例が2件ありました。一つは、脊髄損傷による手指の可動不全の場合。上肢はほぼ通常通り動作可能で、指関節の伸展制限がみられました。左手指は施術後に軽くなった。伸びがよくなった。などの若干の効果があつたものの、右手については効果がみられず、何度施術を行っても同様でした。左手に効果が出ているため、技術的な問題よりも、左右の身体状態が影響していると思われませんが、要因は不明でした。

もう一つは、手指に痺れを訴えている症例です。掌屈の最終域にやや制限があり、握力がやや低下傾向ですが、可動性に大きな問題はなく、日常動作を行えています。この場合は、左右の手指共に施術効果がみられず、痺れ感は変化ありませんでした。推測ですが、痺れの要因が手根や筋緊張によるものではなく、それ以外の要因だったと推測されます。

他の施術同様、症状への対処のためには、症状の原因の鑑別が非常に重要だと思われました。

考察

今回の手関節モビライゼーションは、胸郭モビライゼーション同様、技術的には非常にシンプルです。これまでモビライゼーション技術を習得してきたのであれば、容易に行える技術と思われる。ただし、この施術を行うためには、手の付け根のわずかな空間に存在する8個の手根骨の触り分けが必須です。そのため、技術的にはシンプルでも、解剖学の知識と骨を触り分ける繊細な感覚が必要であり、繰り返しの訓練を行うことも必要になってきます。

今回の臨床報告にあたり、初めは触り分けが不慣れだったため、手のモビライゼーションだけで多くの時間を費やしてしまい、他部位の施術がおろそかになってしまいました。膝や足関節と違い、体重支持を必要としない手関節は、下肢ほどに効果の実感を得にくいこともあり、しっかりとした効果を出すためには、患者様の身体状態の把握、症状の原因の鑑別がより重要になってきます。

今回の症例では、手指関節が他部位へそれほどの影響を及ぼすかはわかりませんでした。単純に手指に起きている症状への対処に止まりましたが、可能性としては、手指の可動性の良し悪しが肘や肩、頸部に影響を及ぼしていることは十分に考えられます。引き続き様々な症例に対しアプローチしていきます。

手指関節モビライゼーション技術を他施術者へ伝えるためには、手指の骨解剖からしっかりとイメージを作り上げていく必要があると思います。そのため、座学を同時に実施することで、漠然と触れるのではなく、イメージと感覚の両面から構築できるよう伝えられればと思います。